

生き物

不幸な猫を増やさない！ 3月22日は「さくらねこの日」 東京・練馬で猫シンポジウム

2019.3.13 06:00

ツイート 反応

おすすめ 1,067

スコップ 15



NPO法人「ねりまねこ」の看板的存在でもある「カッパちゃん」。見ての通り、個性的な白黒模様で多くのファンを持つ人気者。右耳はサクラの花びらのようにカットされ、亀山夫妻に温かく迎えられた「さくらねこ」だ。（NPO法人ねりまねこ提供）



「猫ブーム」という言葉が日本中を騒々しく駆け回り、ここ数年来日する外国人旅行者までもが「猫目当て」ということも珍しくない。かわいい猫に「SNS映え」や「癒やし」だけを求めて、多くの人々が飛びつく今。果たして全ての猫たちが

幸せに暮らしているだろうか。答えは「NO」だ。

多頭飼育崩壊や、無責任な遺棄で数多くの猫たちが命を落とし、生き延びても「ふん

尿」や「鳴き声」などを迷惑だとして捕獲され、里親が見つからなければ殺処分という事も。猫たちがこのような悲惨な状況に置かれるようになった原因の一つは、やはり「増えすぎ」なのだろう。メス猫は年に2～3回出産する事ができ、平均して1度に4匹前後の子を産むという。その子たちも生後半年で繁殖可能な体になる。ねずみ算ならぬ、ねこ算、だ。



増えた猫たちが地域住民の不快感の対象になってしまったら、それが「ノラ猫トラブル」の始まりだ。害獣のように追い立てられた挙げ句、虐待という形で殺されてしまう猫…。そんな悲しい事態をなんとかしようと奮闘する人々がいる。

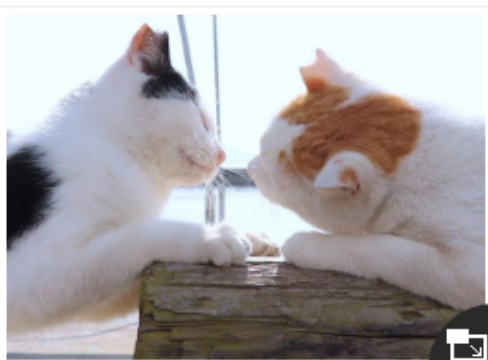
東京都練馬区で公認を受け地域猫活動を行っているNPO法人「ねりまねこ」で理事長を務める亀山知弘さんと副理事長の嘉代さん夫妻だ。飼い主のいない猫たちが、地域で安心して生きていくことができるよう、住民への理解を推進し、猫には適正な不妊手術を施し、増えすぎない環境を守る「TNR活動」を行っている。2014年から、ボランティアで、だ。



パワフルな活動は同じ願いを抱く同士を集めるのか、9日、練馬区の「Coconeri (ココネリ) ホール」で行われたシンポジウム「解決！猫トラブル 不妊去勢手術で増やさない」には、「公益財団法人 どうぶつ基金」の佐上邦久理事長、獣医師の稲垣将治氏、「NPO法人 ねこけん」の溝上奈緒子代表、地域猫活動アドバイザーの石森信雄氏らが出席、講演やパネルディスカッションに約360人の参加者が耳を傾けた。

セッションに約360人の参加者が耳を傾けた。

3月22日は「さくらねこの日」



冒頭で講演を行った佐上氏のどうぶつ基金は1988年の設立以来「犬や猫の殺処分ゼロ」を目指して様々な取り組みを行ってきた。不妊手術を終えた猫の耳先を、目印としてさくらの花びらの様にカットした「さくらねこ」の呼び名を世に広めた事でも知られる。行政や全国の協力病院とタッグを組んで年間2万匹の不妊手術を無料で行っている。3月22日を「さくらニャンニャン」の

語呂合わせで「さくらねこの日」としてPRするなど、猫を思う活動は多岐に及ぶ。

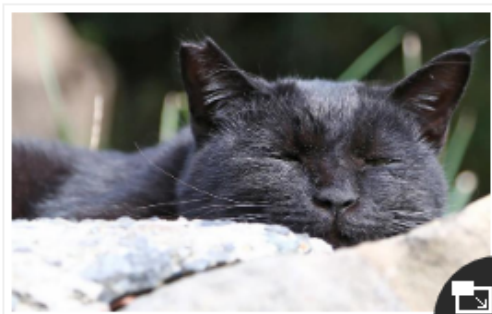
佐上氏はノラ猫トラブルについて「地域猫活動の認知不足も原因の一つ。そもそも、地域猫活動が行われる場所は、紛争状態、にあります」と話す。猫に対する理解の有無で住民間の意見が割れ、自治会などのコミュニティにも影響を及ぼすのだ。猫に給餌するなどの行為により、負い目を感じる事を強いられた人々に、人間の出したゴミの処分や清掃といった過度の要求を強いる事例もあるという。人間の問題まで猫の責任にしてしまうとは、情けないにも程がある。《次ページへ続く》

住民・行政・ボランティア・獣医の「4者連携」

そこで、TNRを先行し、行政のお墨付きを得た上で、登録ボランティアによる地域猫活動を進めるのが今現在のベストだと話すのは石森氏。練馬区の職員として地域猫活動やボランティア制度の立ち上げに尽力し、現在は地域猫活動のアドバイザーとして各地で講演を行うなど、自治体の枠を越えた活動で猫たちの命を救い続けている石森氏のスタンスは、住民・行政・ボランティア・獣医師の4者の連携こそが重要だというものだ。

ボランティアの力で保護されたノラ猫が、獣医師によって不妊手術を受け「これ以上増えない」という事実を地域住民に広く広報すれば、多くの人々が猫の一代限りの一生を見守る事に理解を深めるはずだ。そこに行政のお墨付きがあれば、一層効果的だと石森氏は話す。

「継続可能な活動が結果的に多くの命を救う」



獣医師の稲垣氏は2014年、ノラ猫や地域猫の不妊手術を専門とする「いながき動物病院」を埼玉県越谷市で開業し、18年には年間約5000匹の不妊手術を行うなど、TNRを推進することで「殺処分ゼロ」を目標に掲げる。「不妊手術はコストパフォーマンス最強なんです」という言葉に一瞬ぎょっとしたが「屋外で生きる猫には病

気や怪我がつきもの。その治療にはボランティアや医師の労力のみならず、多額の費用が派生します。不妊手術さえしていれば不幸な運命をたどる猫の数も減ります。確実な効果があります」という説明になるほどと思われた。どうぶつ基金の佐上理事長も

「不妊手術は獣医師にとって、割に合う、仕事です。だからこそ継続可能で、結果的に多くの猫の命を救うんです」と同調する

「ハードルを下げる」「根本的な蛇口を締める」

「ねこけん」の溝上代表は保護猫活動における「ハードルの高さ」を強く指摘する。個人で賄うには無理のある費用はもちろんだが、もっと大きな問題はノラ猫だけではなく、`猫好き、が飼育する猫の多頭飼育崩壊なのだという。猫が繁殖するのは屋外に限った話ではないということだ。もっと安く、もっと誰もが、猫に不妊手術を施せる環境を求めて、クラウドファンディングで「ねこけん動物病院」を設立した。殺処分ゼロのためには多頭飼育崩壊の可能性がある飼い猫にも積極的に不妊治療を進め、根本的な`蛇口、を締めて不幸な命の増加を抑えたいと話した。

同じゴールに向けて



予定時間を大きくオーバーしたディスカッションで、パネリストから出た様々な意見。全員が全く同じはずもない。少しずつ考え方が違っていても、最終目的は`猫の幸せ、だという事は間違いない。

同じ「目的地」に向け、互いの道を尊重しながら、角突き合わせることなく、少しだけ大らかな心で猫たちと接する事が出来れば必ず、猫も人も幸せなゴールが見えてくるに違いない。そう信じたい。

(写真報道局 尾崎修二)